

コリントの信徒への手紙二 一二章一〜一〇節

南山教会 二〇二四年四月二八日

大塚 勁

愛知県に引越してきて1月が経ちました。引越しの手続きに際して、電話で自分のフルネームを伝えることが多くあったのですが、勁（つよし）という漢字の説明は困難でした。名前の由来は中国の故事にある勁草（けいそう）という言葉です。風雪に耐える草という意味です。風雪にさらされるような逆境においても、神によって強められ、希望をもって生きていってほしい、そのような意味がこめられていると聞きました。私たちは「弱さ」という言葉にマイナスなイメージをもってしまいます。出来れば隠したほうが良い。と考えてしまいます。しかし、キリスト教は弱さを大切にする宗教であり、弱さをかかえた人びとが集い、支えてきた歴史があるのです。

聖書には弱さを誇ると語った人物がいます。パウロという人物です。パウロはかつて「サウロ」という名前で生きており、熱心なユダヤ教徒でした。そして「イエスこそ聖書に記された救い主だ」というキリストチャンたちを許せず「あいつらは律法を冒瀆している。ゆるせない。」そう感じてクリスチャンたちを牢屋に放り込んでいました。このように律法に抵抗したキリスト者を迫害していた人物でした。このパウロですが、以前のサウロという名前は、旧約聖書に登場するユダ

ヤ王国の王、サウル王からきています。名前が変わるきっかけは、ダマスコへの途上で「なぜわたしを迫害するのか」というイエスの言葉を聞き、自分自身の生き方が180度大きく変えられたことです。回心し、パウロはイエスを信じ、その福音を人に伝える人になっていきます。パウロはイエスキリストとの出会いから、パウロという名を使うようになったのです。パウロという名前には、「僅かな」や「小さな」や「塵あくた」という意味があります。これまでのサウロというユダヤ王国の初代の王の名とは正反対の弱々しい名前です。サウルという偉大な伝説の王、ユダヤの誇り、知恵と力の象徴であった名前を捨て、自ら「小さなもの」であることを名乗り始めたのです。

パウロの名前には2つの生き方が示されています。1つはサウロという名が象徴する生き方。つまり自分中心に、富や権力、名声や成功を求めて自分の力で、他人をおしのけていきっていく生きかた、自分の気に入らないものは力で押さえつけて、排除しようという生き方です。対して、パウロという名が象徴する生き方は自分の弱さや小ささを認め受け入れる生き方、人に助けられながら、自分が微力ながらも人を助けながら、支え合って生きていくこと、そんな自分達の弱さの中に神様の守りと祝福があることを信じる生き方です。自らを小さいものであると名乗り、宣教活動へと励んだパウロでしたが、それは楽しいものではなく、多くの労苦が伴いました。この労苦は手紙に記すほどに辛いものでありました。本の日の聖書箇所の前節第2コリント一章一六節以降は「使徒としてのパウロの労苦」と表題の付けられた箇所があります。そこには、かつての同胞であった同じユダヤ人から鞭を受けたこと、石を投げつけられたことなどのパウロをうけとめな

い人びとからの労苦（二五節）、旅をしていた船が難船したこと、一昼夜海上に漂ったこともありましたが（二六節）。骨折って、しばしば眠らずに過ごし、飢え渴き、寒さに凍え、裸でいたこともあった（二七節）と記されています。パウロは私たちが想像をするよりもはるかに多くの労苦を抱え、弱さを背負いながら宣教活動をしていたのです。もう無理だ。もうやめようと思うこともあったでしょう。しかし、パウロはこの弱さには決して負けずに、旅を続けるのです。なぜパウロがこのような苦悩や行き詰まりがあっても宣教活動を止めることがなかったのでしょうか。

それはパウロが人の子として生涯を歩む中で、苦労や苦難があり多くの欠けや弱さや悲しみを抱えられたイエスという人物を知っていたからではないでしょうか。イエスはいよいよ十字架へとむかっていく直前のゲッセマネの園では、震えながら「この盃を取り除いてください」と祈りました。ここではイエスの人としての苦悩が見えます。つまり、イエス自身も恐れ、葛藤や悩み、悲しみや痛みの中を歩まれた方であった。しかし、弱さを抱えたイエスこそが、神の子であり、神の愛が現された方であったと聖書は告げています。十字架というこれ以上ない「孤独」と「悲しさ」と「苦しき」の中を生きた人がいた。傷だらけのイエスこそが、神に愛された、神様の子であるという不思議な福音があるのです。それは「孤独、悲しみ、痛み、弱さを嘆いてはならない。そんなあなたに神の愛が現される場であるのだ」というメッセージが伝えられているのです。イエスの十字架に大きく影響を受けたパウロは、弱いときにこそ、「キリストの力」が宿ると信じました。パウロは「サタンから棘を与えられました。」と語ります。そして、ゲッセマネでイエスが「この盃を取り除いて

ください」3度祈ったように、パウロもまたここで、「サタンの使いを離れさせてください」と二度主に願います。弱さの中にあるパウロにイエスは語りかけます「私の恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」その言葉にパウロは強められ、これまでの様々な困難、弱さのなかにあってもともに働く主の支えがあったことに確信をもちました。そして「わたしは弱い時にこそ強い」と語るのです。

これを聞く私たちは、弱さを誇ることができるでしょうか。生きるなかで、どうしても弱さを感じてしまいます。弱さを恥じ、隠そうとしてしまいます。しかし、そのような弱さを誇らなければならないのです。それは弱さと向き合いうけとめるとき、主によって強められるからです。その力は私たちの弱さをすべてなかったことにして力強く変身させてくれる超能力ではありません。むしろ、自分たちの無力さに打ち砕かれる私たちをもう一度たちあがらせてくださる力、命に輝きをとりもどすための強さです。十字架という、最も大きな苦しみを経験されたイエスがそのように語りかけてくださっています。イエスキリストのおわれた痛みや悲しみを思う時、それが私たちの痛みや悲しみと重なるのです。そのとき、共に苦しみをになってくださる方の存在に気づくことができるのです。そして、再び立ち上がり生きていく力が与えられるのです。自らの弱さをありのままに受け入れ、愛し、強めてくださる方の存在を覚え、自らの弱さを誇ったパウロのように、歩みをすすめていきたいのです。